令和４年度第３回 有田工業高等学校 学校運営協議会（学校魅力強化委員会）会議録

「佐賀県立学校における学校運営協議会の運営に関する要綱」第８条第２項に基づき、次のとおり、第３回学校運営協議会（学校魅力強化委員会）の会議録等を公表します。

【期　日】　令和４年１０月２０日（木）　１５：００～１７：００
【場　所】　佐賀県立有田工業高等学校　会議室
【出席者】　学校運営協議会委員　１０名　（欠席者４名）
※ 規則第７条第２項により、委員の過半数の出席により会議の開催は成立する。
本校事務局教職員　　１２名　（欠席者１名）
傍聴者　教育振興課　　２名

【会議の内容】　以下のとおり。　（全体の司会は、主幹教諭）

１　開　会

２　会長挨拶

8 月の甲子園から、あっという間に寒くなったが、夏の暑い時期の甲子園では、私もパブリックビューイングでしっかり応援させていただいた。野球もだが、テレビの中で有工のレッド（赤）がすごく華やかで、甲子園を通して、有工のデザインが非常に優れているということをコメントの中で紹介して頂いたのが自分としてはうれしかった。本日もよろしくお願いします。

３　学校長挨拶

第 3 回学校運営協議会に御出席いただき、ありがとうございます。第 2 回は、夏の甲子園の県大会決勝戦と重なり、書面開催の形をとらせていただいたにもかかわらず、貴重な御意見をいただきまして、ここで改めてお礼を申し上げたい。

上半期の取組について、学校評価中間評価等については、この後、詳しく説明させていただくが、学校の大きな動き等について紹介させていただく。

御承知のように、この夏は野球部の甲子園出場というのが一つの大きなイベントで、現地に応援に来ていただいた委員さんもいらっしゃるし、地元の有田・伊万里地区を中心に、地域の皆様からも熱い応援と御支援をいただいたところである。その甲子園の準備に向けて忙しい中、7 月 29 日と 8 月 1 日に体験入学を実施した。2 日間で、昨年度比 80 人の増という形になり、盛況のうちに実施できた。夏休み期間中には、セラミック科がモラージュ佐賀と博多阪急で「セラミック科展」を開催した。また、お盆明けの 20 日には「SAGA ものすごフェスタ」でセラミック科とデザイン科がブース出展をし、様子を見に行ったが、子供たちを中心に大盛況だった。職員や生徒がサポートして、ろくろ体験やデザイン科の缶バッジ制作など、子供たちが生き生きとチャレンジをしていた。同じ会場では、マイコンカーラリー大会があり、出場校の中で本校が上位を独占し、生徒の活躍を感じたところである。夏休み後半は、2 年生のインターンシップが実施されたが、コロナの影響で、生徒本人または受入先の都合により参加できなかった生徒もいた。こちらについては、冬季休業期間中あたりで、何か代替のインターンシップのようなものができればと思っている。9 月の

3 連休の時期には、佐世保市の会場でデザイン科展を実施し、2 日間で 800 名ぐらいの方々に御来場いただいた。若干の工夫の余地はあると思うが、作品生徒の作品レベルの高さや、デザイン科ではこういう教育をしているというのがよく伝わるような内容だったと思う。10 月 8 日には体育祭を実施した。観客は家族限定という形にしたが、多くの保護者に足を運んでいただいたところである。そして、来月の 11 日・12 日には文化祭を開催する予定をしている。食品関係の模擬店等は少し制限を設けたいと思っているが、2 年前の形に戻して、2 日目は一般観客も入れたいと思っている。特に、中学生や地域の方に有工がどういうことをしているかということを知ってもらう機会になればと思っている。また、コロナの状況を見ながら、一般の方にも見ていただくような機会にしたいと思っている。

最後に、来年度の入試の第 1 回の進路希望調査の結果が出た。毎年、中学 3 年生の志望状況、志願状況というものが新聞に掲載される。本校は昨年度との同時期の比較で、今のところ希望者が 30 名ぐらい増えているような状況である。毎年、県外からの受検者や入学者もいる。ただ、昨年度以上に各科の偏りが見られ、1.5 倍を超えるような科もあれば、一方では 0.7 倍ぐらいの科もあるというところである。

本日の協議会も限られた時間ではあるが、前回同様に、忌憚のない御意見等をいただくことで有意義な会議になればと思っている。どうぞよろしくお願いいたします。

（司会・主幹教諭より）

４の報告・協議事項については、規約第 7 条に基づき、会長が議長となることから、ここからは議事進行を会長にお願いする。

４　報告・協議事項（議長：会長）

（１）学校評価（中間評価）について【全日制・定時制】

①【全日制】

〇中間評価（P.3）について（教頭より説明）

・学力向上については、両方とも A と評価している。特に、23 年ぶりに第三種電気主任技術者試験に今年 1 名合格している。

・心の教育については、上下段とも B と評価している。1 学期の学校周辺の清掃ボランティア活動が雨天中止となったこともあり、生徒アンケートで評価が 2.7 となった。スクールカウンセラーの周知について、生徒の評価が 2.4 である（4 段階で 3.0 以上を達成目標としている）。カウンセラーを利用する延べ人数は非常に多くなってきているが、学校での相談や担任への相談とか、また登校が出来ないなども幾分あるように思われる。スクールカウンセラーの先生との面談ができないというようなところもあり、B としている。

・健康・体づくりのところは、食育に関する評価等を、年間を通じての評価とするため、現段階では B としている。

・業務改善・教職員の働き方改革の推進についてであるが、C と評価している。特に、甲子園出場もあり、本来であれば、夏季休暇や年休取得等を推進すべき夏休み中に、甲子園業務等でうまくとれなかったということがある。昨年度の同時期の比較で 10%減となり、年休取得率が下がっているというような状況である。

・今年度の本校独自の重点目標には SAGA コラボレーション・スクール重点校としての取組につ

いて挙げている。皆様方の御協力により、9 月には就職試験に向けた面接官などをしていただいた。下段の学校 PR については、佐賀新聞社さんの協力等をいただきながら、9 月末現在で 30 回ほど、本校の教育活動の記事を掲載していただいている。セラミック科、デザイン科が全国募集もしているが、県外から約 17 名の参加があった。今週末にもオープンスクールを予定している。以上のことから、A と評価している。

○生徒・保護者・教職員アンケート結果（P.4-9）について（教務主任より説明）

・今年度 7 月初旬に、生徒、職員及び保護者様に対してアンケートを実施した。いずれの対象にも、質問の 1 から 10 あたりまでは同じような内容の質問項目にしている。

・P.5 生徒の回答で、質問 2 は 4 点満点で 3.2 という結果である。質問 12 の地域貢献については、生徒の評価が 2.7 という数字で、ちょっと低めに出ている。例年、昨年度も同じような質問をしていたが低い数字で出ていたので、今年度の質問項目では、「陶器市や外部講師や課題研究などで」というように具体的に挙げて、やっていることに気づいてもらえるようにと思ったが、それでも 2.7 という数字になっている。生徒の意識では、地元や地域に貢献しているというような気持ちが持てないでいるのではないかと思っている。同じように質問 13・14 の学校の魅力発信についても、生徒の評価は 3 を割っている。学校としては一生懸命やっていると思うが、生徒の認識とのずれがあると思っている。

・P.7 保護者様の回答では、質問 2 については 3.45 で、非常に優しく回答いただいていると思う。質問 12 は 3.56 で、地域貢献しているという評価をいただいている。質問 13・14 についても、3.5 及び 3.45 ということで、魅力発信につながっているという評価をいただいていると思う。

・P.9 教職員の意識であるが、質問 2 は 3.4 で、まだちょっと工夫もしくは取組について試行錯誤というような状況ではなかったかと思っている。2 学期及び 3 学期を通して、工夫及び改善がされた結果が出ればと思っている。質問 12 の評価については 3.29 点、質問 13・14 については 3.13 と 3.10 と、3 の前半というような状況である。先生方にも、学校の魅力発信がどれぐらいされているかをもう少し校内でもアピールしていく必要があると思っているところである。会議が始まる前に、佐賀新聞等に載った記事等がファイルされたものをご覧いただいているかと思うが、佐賀新聞等でも取り扱っていただいているが、私たち教職員の意識がまだ薄いのではないかと思う。結果をご覧いただいて、御意見いただければと思う。

②【定時制】

○中間評価、生徒・保護者・教職員アンケート結果（P.10-12）について（教務主任より説明）

・アンケートについては、保護者・生徒とも 40 名程度で少ないので、数字であらわしている。学校評価については、大きく 3 つ、学力の向上、心の教育、健康・体づくりに分けてアンケートを行っている。学力の向上と心の教育については、保護者・生徒とも、全ての項目について高い評価を得ている。生徒の意識と保護者の意識はほぼ似通っている。また、定時制では聴講生制度を行っているが、中間評価の一番下の「地域産業との連携」として、重点の取組として挙げている。

・学力の向上についてであるが、定時制の生徒は、小・中学校時代に不登校の経験をもつ生徒や、ほとんど学校に出ていないという生徒もいる。毎週金曜日に職員が集まって、生徒連絡会をもち、生徒の出席状況や心の変化等にいち早く気づけるように情報交換を行っている。こういった

こともあって、生徒の出席率も現在のところ 90%程度である。先生方が手厚く指導しているおかげで、生徒も楽しく通ってこられているのではないかと思う。それから、進学・就職については、就職で 3 名受験し、現在 2 名合格をいただいている。専門学校等への進学受験はこれからであるが、それぞれの進路実現に向けて頑張っているところである。

・心の教育について、今年度、開校記念行事の際に、上有田駅の近くにある窯元さんで、鉄道が好きな方で、上有田駅に観光列車を呼ぶという活動で地域貢献をされている方に来ていただいた。つい最近、上有田駅に観光列車が停車するということが報道され、生徒に伝えたところ、新聞部の生徒が、上有田駅の窯元さんに取材に行って、地域の活動にも関心を持って、学校内にも「ヤッホー」という新聞で発信した。生徒の主体的な活動を、身近なところで盛り込みながら、生徒に関わっているところである。

・健康・体づくりについては、毎日生徒が登校する際に、玄関のところで検温と体調確認をしている。生徒も各自でそれぞれが、生活チェック票に自分たちで体調等を確認しながら、それを担任の先生・保健の先生とやりとりして、自分で健康管理できるような形で取り組みを行っている。

・定時制は生徒数も少ないので、学校行事でなかなか大きな活動はできない。定時制では 9 月末にスポーツレクレーション（ミニ体育祭）を行った。本校でも体育館で、運動が苦手な子でも参加できるように、レクレーションとして、友達との交流等もできるようにした。

・地域産業の連携というところで、聴講生制度というものがあり、セラミック科とデザイン科でそれぞれ 7 名ずつが受講している。一般の方が週 3 回、夜の時間に授業を受けに来られている。セラミック科はろくろをして作品制作の指導を受けている。デザイン科は定時制の生徒と同じ授業を受けている。大人の方が授業に入ることで、生徒も緊張感をもって授業を受けているし、聴講生の方が生徒にやさしく声をかけてくれて、普段は物静かな子どももその方たちと話して、いい関わりを持っているところである。人との関わりが苦手な子や経験が少ない生徒もいるが、自立に向けて、様々な活動を通して取り組んでいる。生徒の様子を見ていると、楽しく学校に来ている生徒は 90%を超える状況である。

【質疑応答】（議長：会長）

（会　長）委員の方から何かご質問はないか。

（会　長）中間報告で数値目標があるものとないものがあるが、数値目標を途中で変更するということをお考えになられたりはするのか。

（全・教務主任）原則変えないようにと思っている。数値目標を達成するように努力したいと思っている。

（会　長）どうしても数値目標自体が厳しいものもあるのではないかと思った。例えば、働き方改革の評価が C のものなど。C が B に年度末に変わっていくということもありえるか。

（全・教頭）それを目標として取り組みたいと思っている。

（委員１）学力向上のところが 2 つの観点とも A になっていて、第三種の電気主任技術者にも合格したということで素晴らしいと思った。生徒のアンケートを見ると「授業のほかにも習慣的な学習ができている」と回答した生徒の評価が 1.93 となっていて、わざわざテスト対策と書いてあるのに低い。中学生もなかなか勉強しなくて放課後学習会とかを 3 年生では行っているが、学習習慣をつけないと、学校は学ぶ場所なので、魅力のなかに、勉強も頑張る学校として、中学校も頑張るので高校も頑張っていただきたいという意

見である。

（全・教務主任）生徒の回答で「私は学校生活が充実している」という質問項目で、生徒の評価が3.38 という回答だった。勉強に対する回答が 1.93 で、充実しているという回答が3.38 というのが…。勉強に対する数値が上がると充実度がどうなるのかだが、勉強して力をつけることも充実として感じられるようにしていかなければならないと感じた。

（会　長）　ほかに御意見がなければ、（２）にうつりたいと思う。

（主幹教諭）この場で御意見を頂く時間が十分に取れなかったのではないかと思うが、他にお気きの点や御意見等があれば、別紙にて後日でも御意見を頂ければありがたい。

（２）SCS 事業中間報告について【全日制】　（SCS 担当・主幹教諭より説明）

〇SAGA コラボレーション・スクール指定（重点校）における取組の中間報告（主幹教諭より）

この議題については、全日制が SCS 重点校の指定を受けているため、学校魅力強化委員会として、報告させていただく。（報告内容は以下の通り）

・SAGA コラボレーション・スクール重点校指定（全日制課程）について、9 月 21 日に県庁で中間報告を行ってきた時の資料（P.13-16）に基づき、「１．取組テーマ」「２．学校としての課題」「３．SCS 事業（全日制課程）における目標」「４．コミュニティ・スクール導入（学校運営協議会の設置）について」「５．SCS 事業（全日制課程）について」「６．これまでの成果」「７．今後に向けて」の項目で報告を行った。

・４．について、学校運営協議会（学校魅力強化委員会）は、重点校では年 6 回開催するように指定されている。この会議と連動して、毎月 1 回程度、学校運営協議会事務局教職員のうち、全日制の先生方に集まってもらって、校内委員会（校内学校魅力強化委員会）を開き、学校運営協議会で出た意見や協議事項を検討したり、運営委員会や職員会議で報告したりしてつなげ、双方向になるような形で現在進めているところである。

・５．について、コミュニティ・スクール設置以前から行っている各学科の特色や専門性を生かした取組を継続しつつ、それを魅力として十分に伝わっていくよう広報の強化も事業計画の 1 つとしている。

・各学科の取組を可視化することで、全職員の共通理解を図るため、主幹教諭が独自に作成した 5 つの型に分類して整理した（P.15）。このことで、各学科の地域連携・協働した取組の特色や特徴が見えやすくなり、共通理解が進むのではないかと考える。

・本年度はこれまでの取り組みを継続しながら、本年度は委員の皆様にいろいろな意見やアイデアを頂いているので、それを学校運営に反映した形で工夫・改善して、子どもたちの教育活動の充実につなげていきたいと思って進めている。

・（３）「地域みらい留学」による全国募集については、今年度は表に記載の日時でオンライン説明会やオープンスクールを行ってきた。詳しくは、次の協議事項で担当者から説明する。

・（４）重点校へのコーディネーター配置について、4 月以降これまでに 3 回の研修会に参加し、コーディネーター募集合同説明会（土曜日開催、オンラインで 3 回）で募集し、アンケートで興味があると回答した方に後日、個別に Zoom 会議を設定し対応、募集説明をしてきた。参加者は大学生や定職に就いている人や、ただ興味があって参加したという人が多く、全国募集をしたが現時点で応募がない。そこで、7 月の第 1 回学校運営協議会でも委員の皆様に求人の紹介をし、

その後も「広報紙ありた 9 月号」や「ARIKO コミュニティ・スクール通信」に毎月募集の掲載をして有田町内の回覧板で回覧し、9 月には伊万里のハローワークにも求人を出しているが、現在のところまだ決まっていないという状況である。重点校配置のコーディネーターはいない。

・（５）コミュニティ・スクール設置の周知と広報（P.16）について、本校が本年度からコミュニティ・スクール設置ということを、学校内部・外部の生徒や保護者、地域の人に広く知ってもらうために、校門に横断幕を設置（7 月）、学校ホームページに「SAGA コラボレーション・スクール」のバナーを開設し（7 月）、学校運営協議会の議事録や「ARIKO コミュニティ・スクール通信」（5 月から毎月 1 回発行）を公開している。通信は、毎回 1500 枚くらい印刷をして、生徒・保護者以外にも有田町内の回覧板や近隣の小中学校に配布をしたりしている。

・「６．これまでの成果」について、コミュニティ・スクール設置から半年しか経っていないが、1 つ目は、委員の方からいろいろな意見を頂いており、学校運営に反映しようと努めている。また、現在は主幹教諭がコーディネーター的な役割を担っていて、学校の窓口が誰なのかという明確化につながっている。2 つ目は、学校運営協議会と校内会議を連動させながら、丁寧に意思疎通を図ることを心がけて進めているので、徐々にではあるが、教員間の共通理解につながり、学校運営や各取組にも反映されつつあるということである。3 つ目の成果については、学校の魅力発信と広報活動の強化で、様々な媒体で情報発信に努めている。体験入学も昨年度比 80 名増であった。受検までつながればと思う。

・P.17 について、佐賀県のホームページに、これまでの 4 月から 9 月までの取組が紹介されているので、後ほど QR コードからご覧いただきたい。コーディネーター募集の求人票に関する情報も再度載せているので、委員の皆様のお知り合いの方にも紹介して頂きたい。

〇学校運営協議会の仕組みを生かした学校運営や教育活動の工夫・改善　（主幹教諭より）

・（１）について、第 1 回会議（6 月）の中で、委員の方から「有工の魅力」について聞いてみてはどうかという御意見を頂いたので、1 学期の学校評価の時期（7 月）に生徒・保護者・教職員にアンケートを実施した。その自由記述については、資料編 P.①から⑨に掲載している（テキストマイニングでの分析結果を電子黒板に提示して説明）。比較すると、生徒が魅力として感じていることと、先生方が魅力として感じていること、保護者が魅力として感じていることの違いがわかる（具体的には、…中略…）。誰を対象にして学校の魅力を伝えるのかによって、何を魅力として伝えなければならないかなどを考える時の参考に生かしたい。

・（２）について、第 1 回会議（6 月）で付箋を使って KJ 法で行ったグループワークで委員の皆様から頂いた意見として①から⑱まで載せている（P.19）。今度はこれをもとに、先生方にアンケートを実施した。質問 1 は、学校内で早急に対応したほうがいいと思うものについてで、質問 2 は、学校運営協議会と連携して取り組めたらいいと思うものについてである（結果については、…中略…）。整理してみると、学校が主導して企画できるものと、外部や行政の力を借りて、外部が主導して企画してもらったほうが取り組みやすいものがあると感じたところである。

・（３）について、第 2 回会議が書面開催ということで、委員の皆様からいろいろな意見を頂いた。そのなかで、学校運営に反映されたり、検討を行ったりしているものがある（…中略…）。

・（４）について、学校運営協議会委員の皆様や PTA 役員の方に御協力を頂いて、3 年生就職希望者対象の模擬面接指導を実施することができ、大好評であった。

【質疑応答】

（会　長）どなたか御意見等ないか。なければ私からであるが、P.14 の 5 つの型に分けるというのが分かりやすくなると思っているが、P.15 の表を見て分析して何か特徴がわかって、分析しているのか、そのあたりはどうか。

（主幹教諭）5 つの型については私が独自で作成したものであるが、地域と連携した教育活動といった時に、活動することが目的になってしまわないように、何のためにやっているのかとか、どんな力をつけさせたいのかとか、どういった目的なのかとか、このように少し整理することで明確化できるのではないかと思ったことが 1 つである。もう 1 つは、学科の特徴を見るためで、これは本当に 5 つの型に分けられるのかといった問題もあるが、B でもあるような C でもあるようなとか、迷うようなところもある。しかし、このように記号化していくと、セラミック科によく出てくるような分類とか、機械科でよく出てくる分類とかがあるので、やはり目の前の地域での活動となるとセラミック科やデザイン科がたくさんやっていて、機械科や電気科はやっていないのではないかと思いがちだが、将来地元で貢献できる人材の育成というところで、現在、一生懸命に資格取得に励んだり、ものづくりには取り組んだりしていて、地域貢献には数年かかるようなものもあるのではないかというところで、分類化してみることで、可視化できるのではないかと思ったところである。最終的にどうまとめたいかというところまで考えに至っていないが、やりながら考えているところである。

（会　長）確かに複数どうしても重なってしまうところもあるので、最終的にどうなっていくのか気になったので質問させていただいた。

（委員１）資料の P.15 で、5 月から 9 月まで見ても盛りだくさんでいろいろな取組があっていて、やっているということが伝わってくる。中学校では自立しなさいということを言っているが、この取組のなかで子供たちの中からこれをやろうといった取組がどれくらいあるのか。甲子園に行ったことも魅力で誇らしいと思うのだが、学校の魅力について聞いたアンケートの自由記述にはあまり出てきていなかった。子供たちと私たちとでは考え方が違っていて、もしかしたら、このような各学科の行事をする前に考えさせたら、もっとおもしろいアイデアも出たのではないかなと、多分出ると思うので、そういったことを増やしていけたらと感じた。

（委員２）今日は、有田町の総合計画審議会に出てきたが、そのなかで、将来的な有田にとっての人材育成ということで話もあった。資料 P.15 で 5 月から 9 月までの活動も窯業関係が多いと思うが、今年の卒業生で、就職先に地元を選んだ生徒はどれくらいいるのか。

（進路主事）コロナが大きな影響を与えているというか、県内の就職者はコロナを機に増えている。今年度は企業の方もかなり高校にも訪問されていて、求人数も昨年度よりかなり増えている。県内企業の求人も増えている。そのなかで、有田や波佐見などの窯業関係の求人も増えている。求人票の受付開始が 7 月 1 日からであるが、求人票の出方を見たときに、窯業関係の求人票の出方が少し遅い傾向にあると感じる。本校の場合、7 月 1 日までは過去の求人票を見たりしているが、7 月の三者面談のときには第 1 希望・第 2 希望を決めるという流れがあり、今年は 8 月 3 日に推薦会議を行った。ということで 8 月 3 日には受験する就職先を決めてしまっている状況である。そのあとに今年も求人票がたくさん来ているが、製造業関係の求人の時期は今年も早かっ

た。また、焼き物関係でいうと、デザイン科で今回2社内定、セラミック科でも内定を頂いている。確実に求人は増えているので、地場産業の就職先に生徒達も興味をもって受験をしてくれたり、将来、陶磁器産業で頑張ってくれる人が増えればと思っている。

（委員２）解決方法としては、企業からの求人票を早めに出すということになるか。

（進路主事）実は、今も新規で求人票が来ている。3年生は151名いて、約100名が就職希望である。その生徒達に対して2100の求人数である。サービス業を含めると2250くらいある。全体的に売り手市場で、企業は人手不足の状態。7月1日から最初の1週間で200社、直接持参して会社をアピールして帰られるケースも多かった。

（委員２）この前、知事にお会いした。高校卒業して県外流出をくい止めるためにはということでものづくりに特化した学校を県内につくるべきだということをお願いしてきた。佐賀県だけが全国の都道府県の中で唯一、県立大学校と高等専門学校（高専）がない。有田窯業大学校があったが、佐賀大学に昇格している。その点においても、有田では有田工業高校が中心となって、就職ではなくても地元有田に残って、まだ学びたいという人がいると思うので、アピールしてもらえたらと思う。

（会　長）よいアイデアではないかと思う。1つ重要ではないかと思っていることがあって、P.17で、コーディネーターが決まっていないということで、有工は主幹教諭がコーディネーター的な役割を担っている状況のようだが、他の3校は決まりつつあるようなので、委員の方から何か良いアイデアはないか。県のアドバイザーから何か御意見があればお願いしたい。

（アドバイザー）重点校4校でコーディネーターを募集していて、現在2校は確定している。〇〇高校はご主人様が移住されてくるタイミングで奥様が仕事を探していて、通勤しやすいところで決まった。〇〇高校もハローワーク求人で募集して、選考して決まった。どちらも近くで、教育に興味がある方だった。有田工業高校の場合も、近くの方で教育に興味があって、何か仕事を探している方も多いと思うので、情報が手元に届くことが大事だと思う。委員の方もこの情報を流してほしいと感じている。

（会　長）コーディネーターは重要なポジションではないかと思う。今後継続する意味でも、コーディネーターがいないと課題もあるのではないかと思うので、委員の方もいい情報があればよろしくお願いしたい。

（委員３）弊社の職員募集では、週3回の出勤で2人雇った。扶養に入っているかいないかが大きくて、週3日勤務の条件で応募して、すぐに集まって、その中から選考して決めることができた。週4日でこの給与条件だと、扶養から外れなければならないので、そのようなことも考えたほうがいいのではないかと感じた。

（委員４）業務内容を見てみると、県では内側から外に魅力を発信するようなコーディネーターさんを探しているのではないかと感じるが、今の時代は双方向でインタラクティブな関係で、外から内に、有工のほうにもこういうことを伝えたいみたいな、そういうことをめざせば、職種にもっと魅力を感じるというか、言ってみれば副業・兼業みたいな、企業から派遣のような形が取れれば、企業が取り組んでいることに学校のほうが実践しながら、双方向な関係になる。この求人を見たときにはビジネスにするには中途半端に感じ、給与の割には時間的な縛りも多い、リモートでやれるとか副職とかも組まなけれ

ば、ちょっとドロップアウトした人とか、扶養に入っているかどうかとか中途半端な人しか集まってこないのではないかと感じた次第である。的外れなことを言っているかもしれないが、せっかくコーディネーターになるという唯一無二のチャンスを、もう少し柔軟にして、制約を外して、単なる発信マンというよりは、学校を使って何かをしたいという企業も多くあると思うので、そのあたりも対象にしたら面白いのではないかと感じた次第である。

（会　長）貴重な意見をいただいた。確かに発信のみではなく、オンラインでもきちんと双方向にできる人はいると思うので、そのような勤務形態も県として可能ならば、いらっしゃるのではないかと感じた。

（会　長）次に P.18-20 について、学校運営協議会と連動したというか、それこそ学校とコラボレーションしたような形で、学校の先生方と非常に密に情報共有して、委員の意見を生かしたような対応をしていただいているのではないかと、私自身は感じている。委員の意見に対しても、先生方からのご意見もフィードしていただいている。先生方も大変かもしれないが、このまとめられた形で進めていただければと思っている。

（３）協議「地域みらい留学」制度による全国募集【全日制】について

○「地域みらい留学」の取組状況の報告 P.21-22（地域みらい留学担当教員より）

・P.21（１）について、この事業については島根県にある事業所プラットフォームがホストとなって、全国規模での合同説明会を 9 月までに 4 回行う。その間に、本校でオープンスクール（体験入学）や個別説明会を独自で行っている。各回とも 2 日間の合同説明会はすべてオンラインで行っている。全国 90 校くらいが参加して、5～6 校ごとのセッションのなかで各校 5～6 分くらいで学校説明などのプレゼンを行っている。1 日に 3 回くらいの合同説明会があって、その間に単独で個別の説明会 Zoom を設定して、合同説明会で興味を持ってくれた中学生に個別相談会の案内をして、詳しく説明するというやり方である。参加人数については、（…中略…）。

・最終段階として用意しているオープンスクールは、旅費（飛行機や電車など）を自己負担して、有田まで来ることになる（計 3 回）。中学 2 年生もいて、今後の受検まで結びつくかどうかはわからないが、来てくれたエリアについては、口頭で県名のみ紹介する（…中略…）。

・参加数は少ないかもしれないが、昨年度と比較すると上回っている。地域みらい留学による募集も 2 年目に入り、広報なども積極的にしていただいているおかげだと思っているが、2・3 月の受検に本当につながるのかと言えば、実際に来てくれた中学生や保護者と話した実感からすると全員受検するとは考えられず、1～2 名程度受検してくれればという感じがする。全国に数多くある学校の選択肢のなかから、今のところ本校にちょっと興味を持ってくれているだけで、他にも魅力的なことはたくさんあるので、なかなか難しいというのが実感である。

・（３）「今後の課題」についてであるが、募集 2 年目に入り、いろいろなことが見えてきたし、いろいろな展開ができるようになった。学校運営協議会委員の〇〇様にも下宿先を提供いただき、オープンスクールでは体験宿泊の機会を作ってもらっている。レンタカーで移動したりしながら、食事や買い物もしたりして有田での一晩を過ごすということで好評である。宿泊した翌日には、陶磁器企業のなかを見学する機会も提供できていることも大きい。一方で、〇〇様の御厚意に甘えているところもあり、最初の 1 組目は無料で宿泊体験をさせていただいたと記憶している。さすがに、これが続くのはよくないのではないかと思い、現在は半額程度の 1 人 2000 円程

度の宿泊費で体験宿泊をお願いしているが、その分すべて〇〇様の御負担になっていることも事実である。今後は何らかの予算立てをしておくべきなのではないかと思っており、2 年目に入り、明確な課題として見えてきた。また、2 年目に入り、数字的な伸びがどの程度順調なのかというと、思ったより伸びていないという判断もできるのではないかと思っている。

・この事業 2 年目になり、初めて東京で、関東圏内の中学生や保護者と対面で話をする機会があった。会場で、他校の先生やこの事業にもっと前から取り組んでいる方とも話をして改めて思ったことは、とてもきれいな表向きの謳い文句の事業に聞こえるが、一定数以上の不登校傾向の生徒達が環境を変えたいという気持ちで、こちらに集まってきているということも大いに感じる。中山間部や少人数学級とか、探究的・特徴的な学びをする学校とかも多いので、そういうものに過度に憧れている傾向も感じる。何かここに行けば、すべて夢のミラクル高校生活が待っているみたいな感じの、ちょっと幻想を抱いている感もなくもないと思う。実際にそれで実のある 3 年間を送っているのか、失敗例とかは私たちのところにはまったく聞こえてこないので、本当にこの「地域みらい留学」で進学して地方で暮らした子供達がすべて、夢のように 3 年間を過ごして卒業していっているのかと言われると、果たして、受け皿といわれる我々学校側が 3 年間それだけのお世話ができているのか、本当にみんながマッチングよく 3 年間暮らしたのかみたいな疑問符も出てくる。そういうネガティブなことを話の中で出される学校関係者もいらっしゃるのは間違いないと思った。そういう意味では、継続的に続けていくことについては、住まいとか、中学校を卒業したばかりの子供たちの健康面とか安全面とか、それに対しての保護者の方の要求の高さとかをすごく感じる。本当にこれを、佐賀県が県の事業として、看板を掲げて進めたいということであれば、これから、一過性で終わらない「地域みらい留学」制度の全国募集を、複数校に渡って、来年度からは唐津青翔高校も取り組むということになっているようなので、いろいろな課題や問題点は如実にあると感じる。

【質疑応答・意見交換】

（会　長）地域みらい留学についても、コラボレーション・スクールの重要なものに入ってくると思う。これこそ、委員の方のアイデアとか、御支援とかが必要になってくるのではないかと思う。P.21 の協議事項にもなるが、委員の方から御意見を頂きたい。この事業について、私も含めて完全に把握できていないところもあるので質問でもよい。
昨年度の入試のなかで、この地域みらい留学制度を利用された方は何人いるのか？

（担　当）1 名であるが、正式にはカウントしていない。町内で一人暮らしをするというのがこの制度であるが、一家転住であった。ただ、地域みらい留学のイベントに参加していただいて、入学まで至ったので、（1 名）というところである。これ以外に、昨年度はオープンスクールに来てくれた中学生が 2 名いて、そのうち一人は中学 2 年生。もう一人は有望だと思っていたが、受検まで至らなかった。

（委員３）（1 名）ということで、少し補足させていただくと、私が地元の理髪店で、そこに来ていた人が「遠方の人が有工の一般のオープンスクールに申し込んだら断られた」と嘆いていたので、「地域みらい留学制度というのがあるから、そっちに申し込んだらどうか」と話したことで、うまくつながったというところがある。地域みらい留学担当の先生が頑張っているが、通常のオープンスクール（体験入学）をされる担当の先生と横連携をとり、どっちに問い合わせがあっても情報共有できる体制をとったらどうかと思った

が、どうか。

（担　当）どちらも工務・情報部という校務分掌が担当であるが、近隣の中学校を対象とした体験入学は別の教員が担当で、8 月上旬に 2 日間行っている。全体で約 300 人程度の中学生が参加した。今年度は、地域みらい留学の生徒も 1 人参加した。また、体験入学と、地域みらい留学のオープンスクールの 2 日目の住まいの見学に参加した生徒もいた。通常の体験入学に、地域みらい留学の生徒も申し込みできることをホームページに掲載している。ただ、ホームページを見てくれている生徒がどれくらいいるかと思う。ホームページを見てほしいのであれば、ホームページにどうやって誘い込むかという方法が大事。地域みらい留学に参加している全国 90 校の高校はほぼ 100％、学校公式 Instagram や Twitter アカウントを持っている。当然のたしなみと思うが、佐賀県は持ってはいけない的な発想である。本校の Facebook は、半公式というか非公式な運用である。公式な SNS というものを佐賀県は学校として持たないという精神で動いているところがあるので、切り崩していくべきかどうか。正直なところ、インスタから入るとかしないと若い人は見てくれないと思っている。そういう力を借りないと、ホームページにいくら有益な情報を載せていても、見てくれないと意味がない。

（委員５）オープンスクールに来た地域みらい留学の生徒も、一般の受検の日に来て受けるのか。旅費や宿泊も必要になると思うが。

（担　当）そうである。2 年生でオープンスクールに来ている子は、早くから学校を探すために参加していると思う。3 年時の受検に向けていろいろな学校を見て回っていると思うが、昨年度 2 年生で参加した生徒は、本年度 3 年生になってからは個別説明会もオープンスクールにも来ていない。メールをしても返信はない。

（委員５）資料に、一定数の不登校傾向の生徒もいるとあるが、その方たちも応募してこられているのか。

（担　当）説明会にはいる。個別相談会の中で、保護者の方の質問の 6～7 割で「欠席数が多いと不利ですか」というような内容で、詳しく聞いてみると、実はあまり学校に行けてなくて、不登校みたいなことを話される場合もある。東京での対面説明会の時にも、具体的にそのようなことを質問された保護者の方がいらっしゃった。実際に我々も、地域みらい留学の生徒も一般の受検で受ける以上、欠席が多いことが不利になるということは決して言わない。有利に働くことはないと思う。具体的にそれが理由で落ちるということはないと思うが、我々も具体的には説明しづらい。同じ受検の中で、ある一定のラインで不合格にしないといけないケースが出てきた時には、地域みらい留学で受検しても不合格になりうるので、保護者の方も慎重になる。

（委員５）なかなか、これは難しいですね。相当な志をもって、わざわざ他県からでも来たいというような留学型が望ましいですけど。なかなか厳しいですね。それから、地域みらい留学の予算化というのは、どこから出るのか？

（担　当）事業自体は佐賀県教育委員会の事業で、本校は該当校ということで動いている。大きな予算は県教育委員会の教育振興課が担当で、そこで予算化してもらって、それを本校におろしてもらって執行したり、県の事業として執行してもらったりしているような形である。

（委員６）有田町まちづくり課の担当として補足する。この事業については、地域・教育魅力化プ

ラットフォームという NPO が仕組みを作っておられて、そこに全国の県外募集をされる高校が紹介される WEB サイトがあり、そこに参画される費用などは県から出されている。ただ、実際に、有田工業高校に県外から親元を離れて一人暮らしをされるという生徒さんの入学が実現された場合は、月額 3 万円の生活支援費用を有田町の補助金の形で交付をさせていただくことができる。月 3 万円、年間にして 36 万円、3 年間で 108 万という金額がすべて有田町の負担ではなく、過疎債を活用させていただいて、そうすると、7 割は国から交付税措置をしていただける。残りの 3 割については、佐賀県より有田町に補助金をいただけるということなので、皆様からの御支援をいただて、生徒さんへの生活支援をさせていただく。こういったことも伝えながら、全国募集でなんとか御応募いただけるように、私どももサポートさせていただいているところである。今年度も予算化はされているが、今年度入学された生徒さんは、一人暮らしではなくて親御さんも一緒に転居されたので、今年度は該当なしとなっている。

（委員５）入学する以前に、県外から受検に来たり、オープンスクールに来たりすると思うが、そういう補助金はないのか。

（委員６）今のところ、町としての補助金はない。有田町というよりは県立学校になるので、佐賀県での検討になると思う。そのようなことは後々、検討になる可能性はあると思う。

（校　長）地域みらい留学については県で予算を持っているが、本校の他にもこの地域みらい留学に参画している高校は全国各地にある。そのなかには、有田町のような学校がある自治体が寮を作ったりもしているので、受検に必要な費用とかも出している学校もあるのかもしれないと思いながら、ただ、そういった情報というものが入ってこない。今日は県のアドバイザーさんもいらっしゃるので、そういった情報等もお知らせいただければと思っている。県のほうで予算は持っているが、せっかく体験に来てもらうのであれば、その旅費等も少し支援するようなものがあれば、より来やすいのではないかと思う。それから委員 6 さんが聞かれたことは素朴な疑問だと思った。例えば、大学などでは推薦入試の枠などを別枠で持ったりしているが、本校における地域みらい留学は、あくまで定員の中で県外からも受け入れるということで、同じ土俵の中で勝負しなければならない。そこは覚悟をもってもらわないといけないというところがある。無条件に「おいで、おいで」と言えないところもあり、つらいところである。また、今日は中学の校長先生も委員としていらっしゃるが、県外からいろいろな生徒が入ってきたら刺激にもなるし、活性化に向けて、いい影響もあると思うが、このように全国募集をしているということが地元の中学校にどのように映っているのかということが、校長として気になるところである。有田町内の 2 中学校や、伊万里や武雄市内など地元の中学校も大事にしたい気持ちを持っている。地元よりも他県から生徒を集めようとしているのかと思われても心外で、そのあたりは、中学校や中学生を持つ保護者の方に、この制度がどのように映っているのか気になるというのが、正直なところである。

（主幹教諭）私も今年度、地域みらい留学 2 年目に入ったところから、担当教員と一緒に合同説明会に参加したりして関わっている。他県で全国募集をしている高校は、過疎化が進んで、町や学校の存続にかかわるとか、定員割れが続いているとか、そのような学校も多い。また、地域みらい留学に参画している高校は普通高校も多くて、本校は全校生徒 480 人定員規模の学校で、工業高校なので、学校を取り巻く環境も地域の様子も他

の参画校とは異なっている。全国の他の参画校とは違う部分もたくさんあると感じたので、「有田工業高校の場合は」として、全国募集についての協議をお願いしたところである。他県では、町で寮を作ったり、ビジネスホテルを寮にしたり、一人暮らしではなくてハウスマスターさんがいて、食事付きだったり、複数の中学生が共同生活を送って孤立しないようにしているところもある。また、地域みらい留学の説明会に参加する中学生の親子のなかには、子供さんが学校に行けていないことをとても心配されていて、環境を変えてあげると子供は学校に行くのではないかとか、好きなことが学べる学科だったら興味を持つのではないかいう望みをもって、不登校であったり、特性を持っている子供さんと一緒にオープンスクールや個別相談会に参加するケースも見られた。私たちはその対応をするなかで、子供さんの様子を直に感じとるし、保護者の方が子供さんのことや家庭の事情を詳しく話されることもある。一方で、先ほど学校長が申したように、別枠ではなくて定員の中で、他の一般の受検生と同じように見るというときに、あまりに情報として知りすぎてしまっている分、先入観を持たないようにしなければと考えている。ほかの一般の受検生は保護者にも会わないし、面接で話す程度である。地域みらい留学制度で県外からせっかく受検してくれても、定数の中で競って不合格になることもある。

（委員２）留学生を受け入れるとなると住まいのこともだが、一番は食べることではないかと思う。育ち盛りの生徒なので、協力飲食店とかがあるが、先ほど言われたようなちょっと不登校の方とか特性を持っている方とか、そういった方は飲食店に行って食べるとかは難しいだろうし、できれば住まいの中に賄い付きとか、そういう充実性がないと、なかなか来ないと思うがどうなのか。自炊してくださいと言っても、自分が大学生の時でも大したものは作れなかった。高校生となると、もっと作れないのではないかと思うし、好きなものをコンビニで買うと栄養が偏るし、そのあたりの充実性はどうなのか。

（委員３）おっしゃる通りだと思う。定時制で給食を作っておられるが、それを利用することはできないのか。栄養バランスもいいし。

（担　当）給食は定時制の予算化された運営のなかでやっていて、そこに地域みらい留学の子が入ってきて食べるとなると、食材調達の費用のすみわけなどの問題も出てきて、スムーズには進まなかった。あとは食べる時間帯の問題がある。調理師の方が、生徒が部活をした後に食べて帰る時間まで待っていたら就業時間が長くなってしまうみたいなことがあった。意見としては、栄養面も考えると、一番利用したいのだが、公的には、今の制度ではなかなか難しい。

（委員５）現在、県外から登校している生徒さんはいらっしゃるのか。有田町に住んで、学校に来ている方はいらっしゃるか。

（担　当）今年は 1 年生に 1 人いるが、保護者と一緒に住んでいる。昨年度までは大分からセラミック科に来た子が 1 名いた。その子は 3 年間、賄い付きで下宿して、近隣から通学していた。部活動もして、土日もお弁当を作ってもらい、我が子同然のように暮らしていた。ホストファミリーのような下宿だった。その前は、セラミック科にきた窯元の子は、その当時は町内にまだ下宿屋さんがあった時代で、そのおばあちゃんに 3 年間厳しく暮らさせてもらったと、友達を家にあげたら怒られたとか言いながら、下宿屋さんで暮らしていた。今はそこも引退されて、下宿屋というものがないので、有田町内で御協力い

ただけるところを探して、委員の〇〇様にも御協力をいただいて、少しずつ戸数を増やしている状態である。受け入れ先によって条件はまちまちである。アパート形態もあれば、半自炊でその会社の福利厚生のものを利用させてもらえるところや、高額だが賄い付きのところもある。どこかに希望が集中したらどうしようかとか、いろいろな悩みもある。

（委員３）不登校の件も話にあがったが、山内町に〇〇という単位制・通信制の学校がある。今の3 年生が 50 名近く、2 年生が 30～40 名とか、意外と数多くいる。通信制といっても、教室があって、1 日約 20 名の方が通学されているということである。何を言いたいかと言えば、もし有田に来て、生活に慣れなかったときに、地元に戻るよりはそちらに編入するという道もあるとか、〇〇もすごくよかったということを、情報としてお伝えしておく。

（委員７）もし娘が遠くに行きたいといった時に、何を大事にしてあげるかと思った時に、学校ももちろん大事だが、生活がちゃんと安心できるかとか、まわりがどれだけサポートして下さるかとかを見て、親として入試まで踏み込ませてあげられるかどうかを考える。前に通っていた方の経験とか、こういう住み方があるとか、そういう事例とかも丁寧に教えてあげるといいのではないかと感じた。

（委員８）教育は素人だが、皆さんの話を聞いていると、いろいろな問題はあるのかもしれないが、暮らすということに関しては誰が迎え入れるのかをはっきりしないといけないと思う。要は、町が受け入れるのか、それとも工業高校さんが受け入れるのか、県が受け入れるのか、責任の在り処も含めて、そこをはっきりしないとなかなか増えないのではないかと、親御さんもそこを見るのではないかと思った。本当にちゃんと増やすには、高校がインフラを整備して受け入れないと増えないのではないかと、ただし、その手前に、増やす方法としては町も協力しながらインフラ整備も含めて進めていかないと増えないのではないかと感じた。

（会　長）いろいろな意見があって有り難い。最近、〇〇高校とか通信の高校はすごくニーズがあって、高校生も色々なニーズを持っている人が全国的にいると思っている。疲れてきつくなってネガティブになってこちらに来たいという人もいるかもしれないが、環境を変えるとか一人立ちをするとか、自立した新しい高校生が有田で何かやってみたいとかポジティブな人を受け入れられるかもしれない。両方あってもいいが、そのためには情報発信という根幹の部分がきちんとしていかないと、そういう子供たちにリーチしないのではないかと思う。留学を受け入れてきたベースは、そもそも有田工業高校にはあるし、定時制が持っているノウハウやケアもあるし、先生方もたくさんいるので、可能性は高いのではないかと思う。委員の皆様全員から御発言をいただき、予定の時間も過ぎているので、このようなまとめにしたいと思う。

委員の皆様と、地域みらい留学の現状について共有することができ、課題も含めて、今後検討しなければならばならないことなどについて、活発な意見交換がなされた。

（4）その他　（主幹教諭より説明）
・巻末資料及び配布チラシ等の紹介

5　諸連絡
・第 4 回会議は 12 月中旬に開催予定。

6　閉　会

※ 協議事項「地域みらい留学」について、現状報告をふまえて活発な意見交換がなされた。
※ 閉会後、定時制の給食体験を実施した（委員 6 名、事務局より 2 名参加）。

◎　配布資料について

【会議資料目次】
・学校評価（中間評価）【全日制】　P.3
　生徒・保護者・教職員アンケート結果【全日制】　P.4-9
・学校評価（中間評価）【定時制】　P.10
　生徒・保護者・教職員アンケート結果【定時制】　P.11-12
・SAGA コラボレーション・スクール指定（重点校）における取組の中間報告【全日制】P.13-17
・学校運営協議会の仕組みを生かした学校運営や教育活動の工夫・改善【全日制】　P.18-20
・「地域みらい留学」制度による全国募集についての現状報告【全日制】　P.21-22

【資料編】
・「有工の魅力」についてのアンケート結果　　P.①～⑨
・「ARIKO コミュニティ・スクール通信」第 5 号
・佐賀県コミュニティ・スクール研究大会チラシ
・全国コミュニティ・スクール研究大会チラシ
・県展チラシ
・2022 弘道会有田支局シンポジウム
・第 2 回やきもの甲子園チラシ
・（定時制）学校だより「ヤッホー」
・寄贈書籍「地域再生の産業観光論（竹田英司 著）の紹介

【委　員】　（敬称略：五十音順）

○ 岩井　　章　（有田観光協会 専務理事）
○ 岩楯愛久美　（本校デザイン科卒業生）
○ 小嶋　貴之　（有田町立有田中学校 校長）
○ 佐々木元康　（特定非営利活動法人 灯す屋 代表理事）
○ 竹田　英司　（長崎県立大学 地域創造学部実践経済学科 准教授）
○ 土井　　輝　（有田町まちづくり課 副課長）
○ 徳永　隆信　（徳永陶磁器株式会社（幸楽窯）代表取締役 、有田ロータリークラブ会員）
○ 中野　星次　（佐賀新聞社メディア局次長兼コンテンツ部長）
○ 中村　隆敏　（佐賀大学 芸術地域デザイン学部 教授）
○ 西山美穂子　（キッチングランマ 代表、地域住民）
○ 原田　好和　（(有) アトラス 代表取締役、同窓会副会長）
○ 深川　祐次　（株式会社香蘭社 代表取締役社長 、有田町商工会議所 会頭）
○ 安元　孝史　（全日制 PTA 会長）
○ 山崎　哲也　（佐賀県立有田工業高等学校 校長）

【事務局】

○ 馬場　光弘　（全日制 教頭）
○ 吉田　芳克　（定時制 教頭）
○ 橋本　　剛　（事務長）
○ 中西　美香　（主幹教諭、SAGA コラボレーション・スクール担当）
○ 原　　慎一　（教務主任（全日制））
○ 野田　和弘　（教務主任（定時制））
○ 池上千代香　（進路指導主事（全日制））
○ 澤山　大亮　（セラミック科主任（全日制））
○ 森永　昌樹　（デザイン科主任（全日制））
○ 吉武　吉隆　（機械科主任（全日制））
○ 山田　成仙　（電気科主任（全日制））
○ 吉永　伸裕　（地域みらい留学担当）
○ 馬場　美帆　（事務担当）

※ 学校運営協議会については、全日制・定時制合同での設置とする。
※ SAGA コラボレーション・スクール（SCS）重点校指定については、全日制が対象となっているため、全日制を対象として、学校魅力強化委員会を設置する。